



# 営農情報

第107号 令和3年4月30日

## 「あまおう」5月の管理

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 1 生産販売状況

3番果房は、3月下旬に出荷ピークとなりました。また、4番果房では、生産者間でばらつきが大きく、ピークがみられない状況で出荷が続いています。4月中旬までの出荷量（図1）は、前年比107%となっています。

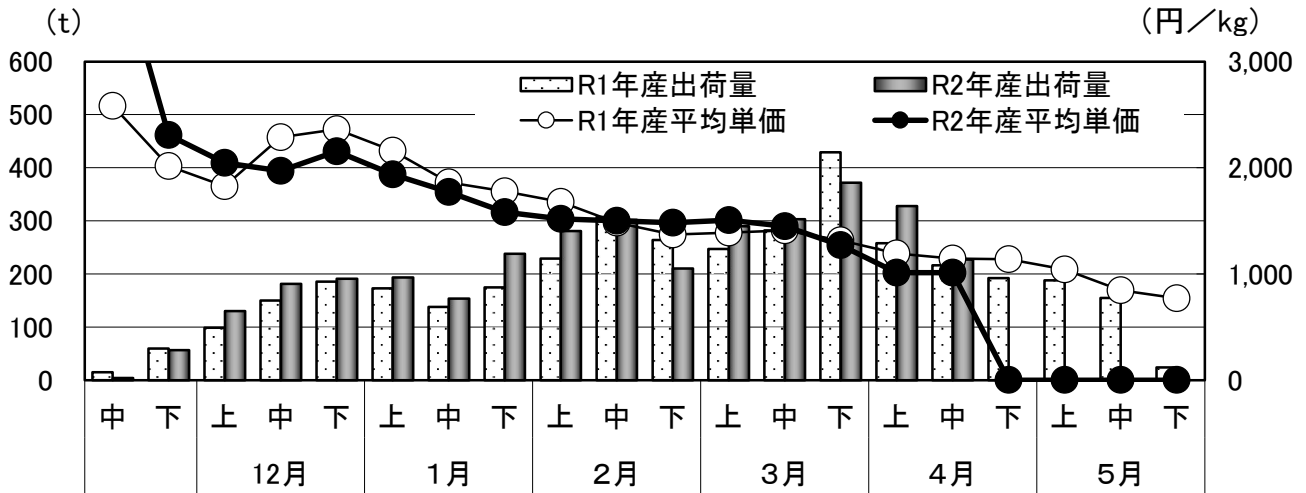


図1 JA福岡大城のイチゴ出荷量と平均単価の推移

### 2 親株の状況

暖冬の影響（図2）で親株の展葉開始は早く、2月中旬頃から展葉し始めたほ場もありました。現時点では、ランナーの発生は株当たり5～7本が中心となっています。また、今後は高温・乾燥による水分不足や追肥遅れによる窒素不足が懸念されるため、十分なかん水管理、肥培管理を心がけましょう。

病害虫では、一部の親株でアブラムシ類、ハダニ類、炭そ病、うどんこ病、疫病等の発生が見受けられます。今後の温度上昇に伴い、病害虫の発生がさらに増えることが予測されるため、炭そ病を中心とした定期的な防除を行いましょう。

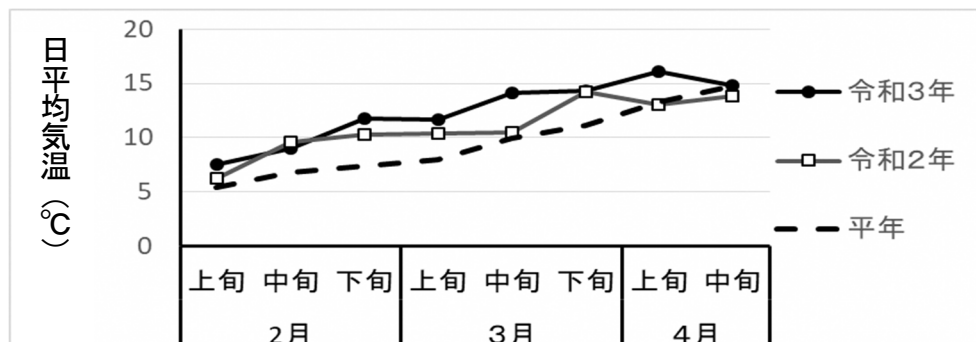


図2 日平均気温の推移（久留米市アメダスデータ）

### 3 今後の管理

#### (1) 本ば管理

傷み果の発生を防ぎ、更なる収量アップを図りましょう。

##### <軟果・傷み果対策>

- ・収穫作業は高温時を避け、着色基準を遵守する。収穫日の間隔は短くする。
- ・サイド・谷・妻面を開放し、換気を充分に行う。
- ・収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、直ちに予冷庫に移す。
- ・収穫後の少量多回数かん水に努める。

(土壌水分の目安は、pFメーターで1.7～1.8、軟果が多い場合は2.0程度)

##### <本田の後片付け>

- ・次作の病害虫の温床とならないように、収穫が終了したら速やかに後片付けを行う。

#### (2) 親株管理

##### <ランナー発生促進>

- ・こまめなかん水と施肥を行う。特に、プランターは乾燥しやすいので、株元にかん水チューブを設置し、確実に株元にかかるようにこまめにかん水する。また、5月上旬までにIB化成S1号を5～10粒/株施用する。

##### <下葉かきと花蕾除去>

- ・下葉及び果梗（花蕾）は、早めに除去する。  
ランナーの発生を促進するために、親株の負担を軽くする。

##### <ランナー配置>

- ・風雨によってランナーが1か所にかたまってしまうと子株が徒長するため、ランナーを均等に配置する。また、通路側に出ているランナーを畝内に配置する。

##### <病害虫対策>

- ・「炭そ病」は1枚展葉する毎（7～10日毎を目安）に定期的な予防を行う。  
また、「炭そ病」は降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
- ・昨年「炭そ病」が発生したほ場では、親株も感染している恐れがあるので定期的な予防散布を行う。
- ・アブラムシ・ハダニ類・うどんこ病・カキノヒメヨコバイの発生が見られるため、適期防除を行う。
- ・雨よけ栽培を行う場合は、風通しを良くして多湿にしないよう注意する。
- ・毎年一部で「萎黄病」や「疫病」の発生が見られるので、常に親株の生育状況を観察する。

### (3) 育苗準備

#### <育苗床の環境>

- ・育苗床は、風通しが良く浸冠水のない排水良好な場所を選び、万全な排水対策を行う。
- ・苗の徒長防止や炭そ病予防のため、ポットの中心間隔を 18cm 程度確保できるように、育苗床は十分な広さを確保する。
- ・地床育苗では、うねの中央部をやや高くし(かまぼこ状)、水がうね上に溜まらないようにする。また、床面には古ビニルを敷き、さらに、ポットシートやマリックスシート等を上に敷く。

#### <育苗培土>

- ・培土には、排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- ・培土量の目安は、8,000 鉢当たり 3.5 寸ポットで 4 m<sup>3</sup>、3 寸ポットで 2.5 m<sup>3</sup>とする。
- ・「炭そ病」が発病した場合に、発病株及び周辺株を除去出来るように、**苗本数は(定植株+次年度親株)より 2割程多めに準備する。**

#### <鉢上げ>

##### 【さしポット】

- ・マルチフィルム上に稲わら被覆を行った後(写真1)、かん水施設を設置し、採苗 1 週間前からかん水して子苗の発根を促進する。
- ・乾燥状態では、子苗の発根が抑制されるので十分にかん水する。
- ・作型に応じた目標鉢上げ時期(6 月上中旬)までに作業できるよう、育苗ポットの準備を計画的に行う。



写真1 全面マルチ+稲わら

#### 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

##### 【すけポット】(写真2)

- ・根がこぶ状になった苗を鉢に受け、ランナーピン等で止める。
- ・太郎苗も鉢上げするが、大きすぎる場合には鉢上げせず、全葉を除去する。
- ・ランナーが、極端に細い子苗は使用しない。
- ・鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるため、乾燥させないようにかん水を行う。
- ・鉢受け作業前後の炭そ病防除を徹底する。
- ・鉢受けは、5月末までに終了する目標で行う。
- ・鉢受けが終わったら、苗の生育促進のためランナーの先端をピンチし、苗の徒長防止と病害虫予防のため、親株の全葉摘除を行う。子苗は6月20日までに切り離す。



写真2 すけポット

※充実した苗を作るには、採苗時期が遅れないようにする。

そのためには、計画的に早めの作業を行うことが重要!!

# 特集「親株～育苗期におけるカキノヒメヨコバイの発生に注意しましょう」

育苗期にカキノヒメヨコバイの発生が見られます。ハダニ類、アブラムシ類等の主要害虫に対しては防除を徹底されていますが、マイナー害虫では症状を知らないことで対策が遅れることもあります。そこで、近年、親株期及び育苗期において増加傾向にあるカキノヒメヨコバイについて紹介します。

## 1 生態

カキやナシなどの果樹類の害虫として知られ、成虫の体長は2.8～3.2mm、体色は羽化直後は白く、次第に淡青緑色となります。

イチゴでは、6月上旬～8月上旬に見られ、特に7月中旬まで寄生虫が多く見られます。



写真3 2齢幼虫



写真4 成虫

※埼玉の農作物病害虫写真集より引用

## 2 症状 (写真5)

新葉から1～2枚目の展開葉に葉脈間の退緑斑、葉の湾曲症状が見られる。



写真5 症状

## 3 防除 (令和3年4月7日の登録内容による)

農薬名	希釈倍数	使用方法	使用時期	使用回数
ハチハチフロアブル	1000倍	散布	1番花の開花まで	1回
モスピラン顆粒水溶剤	4000倍	散布	収穫前日まで	2回以内

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！